マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」♯１５原作シナリオ

山崎浩治

＃１　「スナック香澄」店内
　キャバ嬢の楓がアヤカにスマホを見せている(離れた席にトオルがいる)。
楓「憧れの先輩と付き合うことになったの！」
　スマホには楓とサラリーマン風の翔太のツーショット画像。
アヤカ「楓さんが就職祈願してた先輩ですよね」
楓「白山比咩神社に気多大社、貴船明神に香林寺、那谷寺‥‥とにかく縁結びの御利益があるっていわれるパワースポットには片っ端から願掛けして回ったの」
アヤカ「あたしも願掛けしに行こうかなあ‥‥」
トオル「オレもいいパワースポット知ってるよ」
アヤカ「今度連れてって下さい！」

＃２　「居酒屋まわりみち」店内
　割烹着と姉さん被りで女装しているオネエ所長と菜摘、出勤前の美鈴がいる。傍らにぬいぐるみを置いた菜摘はアヤカレーを食べている。
オネエ所長「どうしてトオルちゃんは、アヤカを口説かないのかしら。誰が見たって彼女のことが好きなのに」
美鈴「あれだけのイケメン君だから、いままで自分からコクッたことないんでしょ？　イケメン君にはありがちなことよ」
オネエ所長「けどさ、アヤカの方だって普通、あれだけお店に通われたら、トオルちゃんの気持ちに気付くでしょうに」
美鈴「オネエ所長、知らないの？　アヤカはトオル君のこと、ゲイだと思っているのよ」
オネエ所長「何よそれ！」
美鈴「だっていつもオネエ所長と一緒だから」
オネエ所長「アヤカって天然なの？　誤解を解かなきゃ(と席を立つ)」
美鈴「(オネエ所長を腕グイして)しばらく様子見ようよ。その方が面白いから」
オネエ所長「(再び腰を下ろし)それもそうね(美鈴と顔を見合わせ、ニヤリと笑う)」
菜摘「(そんな二人を見上げ)二人とも、悪い顔してる！」
オネエ所長「大人って腹黒いものなのよ(と悪魔のような笑み)」

＃３　金沢駅前
　大きな荷物を抱えてやってくるアヤカ。
アヤカのＭ「今日は大学とバイトが休みなので七尾の実家に帰ります！」

＃４　列車の中
　乗り込んでくるアヤカ。車内にはトオルが立っていた。

アヤカ「トオルさん！　どうして七尾線に‥‥」
トオル「ちょっとパワースポットに行こうと思ってさ」

＃５　輪島線の廃線跡
　歩いてくるアヤカとトオル。
アヤカ「廃線跡がパワースポット‥‥？」
トオル「オレ、廃線になってなきゃ輪島線に乗って七尾の高校に通ってたんだけど」
アヤカ「あれ、てことはトオルさん‥‥」
トオル「高校ん時の口癖は〝はいだるい〟」
アヤカ「あ、能登弁！　あたしもいつも言ってた！」
トオル「アヤカちゃん、いつも見とってんよ。ようやっとるわ。大学通いながらバイト掛け持ちして。オレ、アヤカちゃんのそういうとこ好きねんちゃ」
アヤカ「トオルさんも能登の人だったんですね！」
　×　　×
　歩き続けるアヤカとトオル。
トオル「歩きながら食べようと思ってんだ‥‥」
　トオル、鯛焼きをリュックから取り出して半分に割り、大きい方をアヤカにやる。
アヤカ「(クスッと笑い)トオルさんって優しいですね。やっぱり、ゲイの人って優しいな」
トオル「オレがゲイ‥‥？」
アヤカ「だけど、あたしは偏見なんてありませんから！」
トオル「(苦笑して)‥‥(あえて否定しない)」
アヤカ「(ふと思いついて)トオルさんはここで何を願掛けしてるんですか」
トオル「(廃線跡の彼方を見つめて)‥‥」
トオルのＭ「親父と列車に乗ったのは、あの日が最後だった」

＃６　輪島線の列車(以下・回想)
　小学生(低学年)のトオルと職人風の父が列車に乗っている。
　トオル、座席に膝立ちして車窓を楽しそうに見つめている。

＃７　七尾駅のホーム
　列車を降りたトオルがホームを駆け出す。その後ろに続く父。
トオルのＭ「あの日、親父はオレを連れて七尾に遊びに来た」

＃８　父と子の点景
　のとじま水族館でイルカショーを見ているトオルと父。
　七尾マリンパークを歩くトオルと父。
　二人で弁当を食べているトオルと父。

トオルのＭ「楽しい一日だった。でも、楽しい時間は長く続かなかった」

＃９　七尾駅のプラットホーム
　やってくるトオルと父。
父「とうとは仕事で遠くに行かんとならんがや。トオルはしばらく、ばあちゃんと一緒におれ」
トオル「いつ帰ってくるが？」
　父を見上げるトオルの切ない眼差し。
父「分からん。ほんでも必ず迎えに来るさけ、ちょっこし待っとれ(トオルを列車に乗せる)」
　泣きそうな顔で乗降口に立つトオル。
　ドアが閉まり、列車が動き出す。
　ホームで手を振る父。車窓のなかの父の姿がどんどん小さくなっていく。
　涙を堪えて、父を見ているトオル。
トオルのＭ「それが親父を見た最後だった」

＃１０　廃線跡(現在)
　歩いてくるアヤカとトオル。
トオル「親父にはたくさん借金があったんだ。ばあちゃんには働いて借金を返して帰ってくると言ってたらしいけど、それっきり消息不明‥‥」
アヤカ「‥‥」
トオル「こうして廃線跡を歩いていたら、いつか親父が帰ってくるような気がしてね」
アヤカ「トオルさんはお父さんを探すために探偵さんになったんですか‥‥」
トオル「(何か言いかける)‥‥」
　その時突然、警笛の音が響きわたった。
　緩やかにカーブした線路の奥から列車が驀進してくるのが見える。
アヤカ「(目を見開いて)‥‥うそ」
トオル「アヤカちゃん、危ない！」
　トオルがアヤカの手を引っ張って、線路から飛び退く。
　２人の脇を間一髪で列車が疾走していく。
　×　　×
　フラッシュ。列車の車窓に、親子の顔が見える。
　子どものころのトオルとその父の姿が幸せそうに笑っている。
　×　　×
トオル「(フリーズして)‥‥」
　線路の向こうで忽然と消える列車。
　言葉を失って立ち尽くすトオル。
トオルのＭ「とうとはもう、死んでいるんだね‥‥」
　トオルの背中、震えている。

アヤカ「(そんなトオルの背中を見つめて)････」
アヤカのM「トオルさんが泣いていました。でも、あたしには何も言えませんでした」
　夕陽に染まる廃線跡にいつまでも立っているアヤカとトオル。